

Title	The Book of the Duchessに関する一考察
Sub Title	The book of the Duchess
Author	小長谷, 彌高(Konagaya, Yataka)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1959
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.9, (1959. 12) ,p.131(20)- 150(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00090001-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

The Book of the Duchess に関する一考察

小長谷 彌 高

The Book of the Duchess について批評家達は従来多くの欠点を指摘し、此の作品を非常に低く評価して来た。^(註 1) 彼等は此の詩には美しく効果的感動的な節がないでもないが、全体としては未熟で退屈で且つ冗漫で、脈絡と均衡とを欠如して居り、詩趣上の不調和と韻律上の欠陥が顕著であつて、最初の部分が無気力で結びの部分が唐突であるとしている。そして彼等はこの詩を *The Canterbury Tales* に到る Chaucer の発展の一里塚として主に注目して来た。然しながら其等の批判の或るものは此の詩の理解と評価に於て明らかに正鵠を得ていないので、近年 W. Clemen, J. R. Kreuzer, G. L. Kittredge, B. H. Bronson などに依り此の作品の再評価が企てられた。^(註 2) 本稿では中世宮廷人としての Chaucer の立場が此の作品を如何に規定したか、又宮廷人としての Chaucer の立場がこの詩に如何に反映しているか、此の詩で Chaucer が何を言わんとしているのか、について検討し、従来の批評家達が Chaucer の欠点として来た点の幾つかについて再考し度いと思う。

Chaucer は若くして最初 Lionel 公の宮廷に仕えて以来殆ど一生を宮廷人として過ごした。彼は詩人としてではなく、廷臣としての仕事のために宮廷に仕える宮廷人^(註 3)であつた。宮廷人になる時彼も *indentures* に依つて

.....serra tenuz a servir nostre.....seigneur tant en temps de peas
come de guerre es quelles parties q'il plerra a nostre dit seigneur bien
et convenablement arraiez.^(註 4)

と忠誠を誓わされたに相違ない。宮廷人にとつて此の忠誠は根本的なものとして要求された。*The Book of the Duchess* の中で 'man in blak' の愛神に対する態度の中にも、^(註 5) 仮令全く因襲的な表現であるにせよ、忠誠が如何に絶対的なものであるかを見る事が出来る。

.....I have even yit
 Be tributarye and yiven rente
 To Love, holly with good entente,
 And throug plesaunce become his thral
 with good wille, body, hert, and al.
 Al this I putte in his servage,
 As to my lord, and did homage ;
 And ful devoutly I prayed hym to,
 He shulde besette myn herte so.
 That hyt plesance to hym were,.....
 (註 6)

Chaucer が何故王室に仕える事を志したか、宮廷人として若い時に実際どのような仕事をしたか詳かでないが、兎に角若い時から宮廷で一生を送る決心をしていた事は想像に難くない。そしてそれ相当の宮廷人としての忠誠心があつた事は当然考えられる。

1369年9月12日 Duke of Lancaster であつた John of Gaunt の夫人 Blanche がその年流行した黒死病で亡くなつた。John of Gaunt は政治的に最高権力者の一人で、後には権勢国王を凌ぐ黒幕の人物になつたが、個性の強い豪傑肌の人で、Wycliffe を保護した事もある。しかも Wycliffe の思想には殆ど宗教的理解も関心も持つていなかった。^(註 7) Chaucer と同時代の詩人 John Gower も改訂した *Confessio Amantis* を patron の John of Gaunt に献じ、彼を讃美している。

This bok, upon amendment
 To stonde at his commandement,
 With whom myn herte is of accord,
 I sende unto myn oghne lord,
 Which of Lancaster is Henri named:
 The hye god him hath proclamed
 Ful of knythode and alle grace.
 (註 8)

Chaucer は此の John of Gaunt とこの年までに 12 年近くの交わりがあり、何時からか彼を patron としていた。^(註 9) Duchess の計報が届いた時も Chaucer は John of Gaunt と共に Picardy の戦場に居た。John of Gaunt は女性関係が放逸であり相当乱脈な生活のために有名であつたけれども、他の女性に対してはどうかあれ、

なくなつた **Blanche** に対しては非常に深い追悼の念を持つていた事は記録からも想像出来る。^(註 10) *The Book of the Duchess* は夫人の死を悼む此の **John of Gaunt** に捧げられた哀悼詩である。

Chaucer がこの詩を自発的に書いたかどうかは明らかでない。と云うのは国王の命令に基いて *Confessio Amantis* を書いた事を喜んでいる **Gower** の改訂前の版の一節は、一応詩人として世間に認められていた彼でさえも自ら詩を作るのに周囲からの抵抗を感じた事を裏書きしているからである。

.....upon his [i. e. Richard II] comandyng
Myn herte is wel the more glad
To write so as he me bad ;
And eek my fere is wel the lasse
That non envye schal compasse
Withoute a resonable wite
To feyne and blame that I write.
A gentil herte his tunge stilleth,
That it malice non distilleth,
But preyseth that is to be preised ;
But he that hath his word unpeysed
And handleth <onwrong> every thing,
I preye un to the hevene king
Fro suche tunges he me schilde.
And natheless this world is wilde
Of such jangling,.....^(註 11)

まして駆け出しの素人詩人 **Chaucer** が自らこの詩を作つたとすれば、**Gower** 以上の抵抗を感じた事と思われる。この抵抗を押し切つて自発的に *The Book of the Duchess* を書いたとすれば、彼自身この詩に対して相当の自信があつた事が窺える。又若し此の詩を **John of Gaunt** の命令で書いたとすれば、^(註 12) その時までには詩人としての **Chaucer** の才能が広く宮廷に認められていた事になる。結局 *The Book of the Duchess* が **John of Gaunt** の依頼に依つて書かれたとしても、或は又 **Chaucer** が自発的に書いたとしても、その時までには **Chaucer** が宮廷で詩人として或る程度自他共に認められていた事は明らかである。そしてその詩の中に **John of**

Gaunt に対する宮廷人としての忠誠を彼が明らかにする事は勿論当然の事であつた。Edward II の后 Phillipa と共に Hainaut から英国に来て宮廷に仕えていたフランス人 Froissart でさえも英国の宮廷に居る間英国王に対する忠誠から離れる事は出来なかつた。彼が後に ‘*sa loyale partialité*’ とか ‘*narrateur fidèle et partial*’ の譏を受けるのも此れが原因である。^(註13) *The Summoner's Tale* で ‘*frere*’ が

Beth war.....with lordes how ye pleye.
Syngeth *Placebo*, and ‘I shal, if I kan,’
But if it be unto a povre man.
‘To a povre man men sholde his vices telle,
But nat to a lord, thogh he sholde go to helle.’^(註 14)

と注意しているように、君主に対しては全く一面的な発言しか許されなかつた。長い宮仕えの間主君と一度も意見を異にして論争した事のない *The Merchant's Tale* の *Placebo* の意見にも此の発言の一面性が察せられる。

I have now been a court-man al my lyf,
And God it woot, though I unworthy be,
I have stonden in ful greet degree
Abouten lordes of ful heigh estaat;
Yet hadde I nevere with noon of hem debaat.
I nevere hem contraried, trewely;
I woot wel that my lord kan more than I.
With that he seith, I holde it ferme and stable;
I seye the same, or elles thyng semblable.’^(註 15)

以上のように忠誠と云う廷臣に義務的な態度と、occasional poem としての詩の性格と、^(註 16) John of Gaunt の私生活の最も微妙な部分に関する内容とが *The Book of the Duchess* を外から規定する事になつた。勿論こうした義務的な忠誠とは別に彼自身の自然な感情である忠誠が存在している。彼が傷心の John of Gaunt の面前で dreamer の口を通して

.....by my trouthe, to make yow hool
I wol do al my power hool.’^(註 17)

と決意の程を述べた時、Chaucer は臣下としてばかりでなく、人間的にも全く真摯な気持だつた事は推察出来よう。

Chaucer が patron の夫人の哀悼詩を書くにあたって忠誠が必要だつた事は以上述べた通りであるが、*The Book of the Duchess* でその忠誠を表明する立場にある人物は dreamer である。その dreamer も J. R. Kreuzer が明確に区別した五月の朝小鳥の声に目覚めるいきいきとした the dreamer in the dream の方であつて、恋わずらいのために不眠でぼんやりして居て眠れぬままに Ovid の Ceyx と Alcione の話を読む the dreamer awake ではない。*The Book of the Duchess* は *Le Roman de la Rose* に依つて弘められた dream-vision の枠に従っている。あからさまな complaint が宮廷人の Chaucer には憚られる理由があつたにしても、こうした伝統的な dream-vision の枠の中での表現の方が彼により大きな詩想を促したと考えられる。^(註 19) さて、その dreamer in the dream は ‘whelp’ を追つて森にふみこみ ‘a man in blak’ が

‘I have of sorwe so gret won
That joye gete I never non,
Now that I see my lady bryght,
Which I have loved with al my myght,
Is fro me ded and ys agoon.....’^(註 20)

と最愛の lady の死に complaint を言つているのをはつきりと立聞きしてしまう。この ‘man in blak’ は勿論 Blanche を失つて喪に服している John of Gaunt の立場に一致する。その dreamer in the dream は彼に深く同情を感じ、近づいて丁寧に挨拶する。

.....stood
Before hym, and did of myn [i. e. dreamer’s] hood,
And had ygret hym as I best koude,
Debonayrly, and nothing lowde.^(註 23)

然し ‘man in blak’ は瞑想に耽つていて、しばらくたつてやつと彼に気がつく。

I am ryght sorry yif I have ought
Destroubled yow out of your thought.
Foryve me, yif I have mystake.^(註 24)

と the dreamer in the dream は自分の無寝を詫び、悲しみの余り口の重くなつていた ‘man in blak’ から兎に角悲しみをすつかり吐き出させてしまおうと咄嗟に決心する。即ち彼は ‘man in blak’ の complaint を立聞きして彼の悲しみのい

われについてははつきり知つていたにも拘らず、完全な無知を装う事にして云う。

.....telleth me of your sorwes smerte;

Paraunter hyt may ese your herte,

(註 25)

That semeth ful sek under your syde.

それに答えて ‘man in blak’ は彼が失つた恋人が如何に美しく優しく立派な女性であつたかを長々と述べる。自分の愛も空しかつた the dreamer は尚無知を装い、amour courtois に基いて考えられる失恋の他の多くの可能性を前提として更に尋ねる。

What los ys that?.....

Nyl she not love you? ys hyt so?

Or have ye oght doon amys,

That she hath left yow? ys hyt this?

(註 28)

For goddes love, telle me al.

‘man in blak’ は彼女が彼の愛を受け入れた事、彼女との愛の交歓が幸福であつた事を仕方なく述べる。the dreamer in the dream はこうして始めのもくろみ通り相手に言わせただけの事をすつかり言わせる事に成功した。然し dreamer の立場は全く妙なものになつてしまつた。

“God wot, allas! ryght that was she!”

“Allas, sir, how? what may that be?”

“She ys ded!” “Nay!” “Yis, be my trouthe!”

“Is that youre los? Be God, hyt ys routhe!”

(註 29)

(註 30)

こうした ‘man in blak’ との劇的な対話に見られる the dreamer in the dream は血の廻りの悪い間抜けな人間である。Chaucer は或はここで art poetical の中の diminutio を念頭に置いていたのかも知れないが、兎に角此の事は ‘man in blak’ との出会いで咄嗟の機転を利かせた dreamer in the dream の最初の計画の当然の帰着であつて、‘man in blak’ を慰めるために他に方策がなければ自分の立場を犠牲にさえる the dreamer in the dream の一途に忠誠な態度を示している。この dreamer の態度は Troilus and Criseyde の第五巻で示される Pandarus の態度と全く異なる。

Pandare answerde, “It may be, wel ynough,”

And held with hym [i. e. Troilus] of al that evere he seyde.

But in his herte he thoughte, and softe lough,
 And to hymself ful sobreliche he seyde,
 “From haselwode, there joly Robyn pleyde,
 Shal come al that that thow abidest heere.
 Ye, fare wel al the snow of ferne yere!”
 (註 31)

愛情を裏切つてしまつている Criseyde の歸りを空しく待ちわびている Troilus を慰めているこの Pandarus は *The Book of the Duchess* で ‘man in blak’ を慰めた dreamer in the dream と同じ立場にある。然し老獪な手練手管を使う狡猾な Pandarus の二枚舌は the dreamer には全く見られず、そこには主君に忠誠な dreamer の真情のみが感じられる。

この dreamer in the dream に依つて主君に対する忠誠を表明した Chaucer が *The Book of the Duchess* に依つて何を言わんとしているのか、即ち此の作品に於ける Chaucer の意図が何であつたかを次に取りあげ度い。そのために此の作品の一つの特徴である反復を検討しなければならない。中世の art poetical は反復の型としては *repetitio, conversio, complexio, traductio, conduplicatio, adnominatio, gradatio, interpretatio* 等を方式化していた。^(註 32) Geoffrey of Vinsauf や John of Garland 等に依つて方式化されたこの art poetical は中世の詩想と表現を修辭的に規定していた。^(註 33) Chaucer は Geoffrey of Vinsauf の *Poetria nova* を少なくとも一部分は知つていて *The Canterbury Tales* で言及しているが、彼の習作時代のフランス詩の翻訳を通じてその詩法を充分習得出来たに相違ない。^(註 34) *The Book of the Duchess* の Blanche の描写に見られる如く、Chaucer は自由に取り捨選択しながらもその詩法に従つている。^(註 35) 更に Herry Bailly が ‘clerk’ に対して^(註 36)

‘Youre termes, youre colours, and youre figures,
 Keepe hem in stoor til so be that ye endite
 Heigh style, as whan that men to kynges write.’
 (註 37)

と王達には格調の高い文を書くべきである事を云つている事からも、初期の Chaucer が John of Gaunt に献ずるこの詩にどれ程気を遣つて又どれ程努力して art poetical に依る色付けをしようとしたか推察出来る。^(註 38) その art できらびやかに技巧的に修飾された *The Book of the Duchess* の中に目立たないけれども作品をしつかりと組織づけている反復に注目する必要がある。尤もその修辭家達は何故に又如何様に其等の art の細目を用いるかについては殆ど言及していない。つまり如何なる理

由で如何なる目的のためにその art の各々の技術を用いるかについては作者に殆ど総て委ねられていた。中世の作家の originality はここに見出されなければならない。^(註 40)

The Book of the Duchess に於ける originality の一つはそこにある。*The Book of the Duchess* は主題の反復から phrasal repetition, verbal repetition に至るまで多くの反復から成立つていて、その各々が Chaucer に依つてどのような目的で使用されているかを明らかにする事は作品の理解に重要な鍵を提供する。本稿ではその各々の修辭上の構想が art poetical のどれに相当するかではなく、その構想が目的としていることについて検討する。

The Book of the Duchess の反復は決して偶発的なものではなく、離れた語句の連結や感情の強調のため明らかに意図的に用いられている。この事は Everett が ‘slep’ や ‘fals’ について指摘している通りである。^(註 41) verbal repetition や phrasal repetition について一例をとれば、‘man in blak’ は自分の悲しみについて

.....whooso wol assay hymselfe
Whether his hert kan have pitee
Of any sorwe, lat hym see me.^(註 42)

と述べ更に繰返して次のように断言する。

.....whoso wiste al, by my trouthe,
My sorwe, but he hadde rowthe
And pitee of my sorwes smerte,
That man hath a fendly herte;
For whoso seeth me first on morwe
May seyn he hath met with sorwe,^(註 43)
For y am sorwe, and sorwe ys y.

こうして彼はあからさまに反復される ‘sorwe’ で自分の感情を強調し、又明確に呈示する。この ‘man in blak’ はたまたま通りかかった未知の人 the dreamer in the dream にその悲しみの原因として、運命の女神と将棋をして敗れた事を話す。この部分は夫人の死の婉曲な譬えである。その dreamer は将棋で ‘fers’ を失つたからと云つて悲しむ人など聞いた事がないと云う。その ‘man in blak’ は無作法にわたらないように態と慇懃に遠まわしに云つたのに相手の察しの悪いのを零して、

Thou wost ful lytel what thou menest;

(註 44)

I have lost more than thou wenest.

と云い、自分の失つた lady が如何に優しく美しく立派だつたかを話す。この部分は *courtoisie* の面で理想化された Blanche の eulogy であり、Chaucer は ‘man in blak’ の口を借りて充分に Blanche を讚美している。そしてその婦人をどのように失つたか、即ち普通の所謂失恋のように愛情を打明けて断られたのか、それともその段階にも至らないのか呑み込めないように見える dreamer に彼は繰返して

.....thou nost what thou menest;

(註 45)

I have lost more than thou wenest.

と彼の愚鈍な事を嘆き、彼が実際に彼女の愛を得ていて幸福であつた事を物語る。この部分では *amour courtois* の理想的恋愛が述べられている。そして今度は恋人との間に過ちがあつたと想像し、その婦人の愛の行方を訝つているような態度を取り、‘where is she now?’ と尋ねる dreamer に対して彼は三度

Thou wost ful lytel what thou menest;

(註 46)

I have lost more than thou wenest.

と嘆き、‘She ys ded.’ と答える。此の三度繰返され、対話の内容を四分して夫人の死の婉曲な譬えと、*courtoisie* で理想としている女性像と、同じく理想化された恋愛と、‘She ys ded.’ と云う句に分けている phrasal repetition は内容を四つの部分に区劃する境界の役割をなしているのではなく、有機的に最初の三つの部分を第四の部分‘She ys ded.’ に結びつける key-phrase として対話の構成上重要な機能を果している。又同時に此の反復には当然自分の悲しみを他人に分つてもらえないと思つている ‘man in blak’ に対する dreamer の同情的態度も強調されている。この態度はそのまま Chaucer の John of Gaunt に対する態度でもあつた。

更にもう一つ顕著な phrasal repetition は

1)I wol telle yow wherfore ;

2)I wol tel the why ;

3)I wol telle some why soo.

4) I wil anoon ryght telle thee why.

(註 47)

5)I wol tellen how,

等 dreamer や ‘man in blak’ の言動の動機や原因を少しずつ明らかにしようとする傾向を示して繰り返される句である。此等は *The Book of the Duchess* の暗

示的色彩を更に濃いものにしてゐる。

此のように暗示的で一見まつまりや釣合を欠いているように見える *The Book of the Duchess* に有機的なまつまりと作品としての主張を与えているのは主題の反復^(註 48)である。即ち失恋の主題、眠りの神に対する祈りとそれが叶えられると云う主題が二度三度と繰返される。此の主題の反復について *Alcione, dreamer, 'man in blak'* の順に検討することにする。

先ず *Alcione* は航海から歸つて来ない愛する夫の身を案じて、*'For sorwe ful nygh wood'*^(註 49) と全く乱心してしまつている。そして眠りの女神 *Juno* に眠らせてくれるように

Send me grace to slep, and mete
In my slep som certeyn sweven
Wherthourgh that I may knowen even
Whether my lord be quik or ded.^(註 50)

^(註 51)と祈る。するとその願いは聞き届けられ、*'wonder'* な夢の中で *Ceyx* に会える。死んだ *Ceyx* は *Alcione* に云う。

.....My swete wyf,
Awake! let be your sorwful lyf!
For in your sorwe ther lyth no red.
For, certes, swete, I nam but ded;
Ye shul me never on lyve yse.
But, goode swete herte, that ye
Bury my body, for such a tyde
Ye mowe hyt fynde the see besyde;
And farewel, swete, my worldes blysse!
I praye God youre sorwe lysse.
To lytel while oure blysse lasteth!^(註 52)

私は死んでしまつて再び生きてまみえる事はない。いまさら悲しんでも詮なき事だ。私のなきがらをほうむつて欲しい。愛しき者よ、さようなら。神があなたの悲しみを鎮めんことを。我々の幸福は余りに東の間のものであつた。死んだ *Ceyx* は悲しみの *Alcione* に夢で以上のように諭す。

次に *the dreamer awake* は^(註 53)

.....men myght axe me why so
I may not sleepe, and what me is.
.....

.....I have suffred this eight yeer,
And yet my boote is never the ner ;
For ther is phisicien but oon
That may me hele ; but that is don.
(註 54)

と空しく失恋していて、‘Al is ylyche good to me’^(註 55)と無気力になつている。そして
眠れぬままに Ceyx と Alcione の話を読んで‘wonder’^(註 51)だと思ふ。そして Alcione
と同様に戯れに眠りの神に祈つて見る。

Rather then that y shulde deye
Thorgh defaute of slepyng thus,
I wolde yive thilke Morpheus,
Or hys goddessse, dame Juno,
Or som wight elles, I ne roghte who
To make me slepe and have som reste, —
I wil yive hym the alderbeste
Yifte.....
(註 56)

このようにいいかげんに祈るとすぐ眠りに落ちて‘wonderful’^(註 57)な夢を見る。

さて最後に‘man in blak’は

.....I see my lady bryght,
Which I have loved with al my myght,
Is fro me ded and ys agoon.
(註 58)

と最愛の lady を失くし、‘wel nygh lost hys mynde.’^(註 59)と放心状態になつている。
彼は自分が‘sorwe’の権化であること、そしてその理由は立派な lady をなくした
ためであることを the dreamer in the dream に明らかにする。

‘man in blak’ と the dreamer in the dream の対話は the dreamer の
“Be god, hyt ys routhe !” と云う短い言葉で突然終つている。‘man in blak’
を慰めようとしたその dreamer がこの言葉で実際に‘man in blak’を慰められ
たと考えられるであろうか。又此の短い言葉で突然結末になる *The Book of the
Duchess* で John of Gaunt を慰められると Chaucer は思つたであろうか。夫を

失つた Alcione に深く同情して

.....trewly I, which made this book,
Had such pitee and such rowthe
To rede hir sorwe, that, by my trowthe,
I ferde the worse al the morwe
Aftir, to thenken on hir sorwe.

(註 60)

と自分まで気分を害してしまつた程同情深い Chaucer がその短い慰めの言葉で John of Gaunt に充分同情を表わしていると考えられるであろうか。それとも

Y trowe no man had the wyt
To konne wel my sweven rede ;.....

(註 61)

と云う the dreamer の言葉は夢の意味をとろうとする努力を ‘wonderful’ と云う言葉の彼方に追いやつてしまう事を望んでいるのだろうか。此処で再び dreamer の性格について考えて見る必要がある。‘man in blak’ と同じく失恋している立場の the dreamer awake も、‘man in blak’ と表面的には対等に口をききながら血の廻りの悪い男として忠誠を示している the dreamer in the dream も共に謂わば Chaucer の分身のようなものであるけれども、それらの分身を越えて物語を語っている Chaucer が居るのである。‘man in blak’ が Blanche を失つた彼自身に外ならないことに聴者の John of Gaunt は容易に気付いている。‘man in blak’ との対話はその “Be god, hyt ys routhe !” で終わっているが、John of Gaunt はこの物語の the dreamer awake の悩みや Ceyx と Alcione の話も聞いている。更に dreamer が最後に覚めて Ceyx と Alcione の本をまだ手にしている事も彼は聞いている。Chaucer が結びの部分で the dreamer を眠りに導いた Ceyx と Alcione の物語に再び言及している事を John of Gaunt は注意するであろう。そして彼は dreamer の言葉が終つても更にそれ以上の事を、dreamer や Alcione, 更には ‘man in blak’ を *exemplum* として作家の Chaucer が表現しようとしているのに気付くであろう。*The Book of the Duchess* は dreamer と Alcione と ‘man in blak’ について主題の反復があり、彼等の situation が parallel であると云う構成からすれば連想が ‘man in blak’ を更に導いて行く。Ovid からの物語が the dreamer awake に眠りの神の存在とそれに対する祈りを教唆したように、同じ立場にある ‘man in blak’ も Alcione と the dreamer awake とから同じく神の存在とそれに対する祈りを二重に暗示されている。そして ‘man in blak’ は眠りの

神に冗談にでも祈る立場に居る。その上眠らずにいる事は自然の理に反する。

.....wel ye woot, agaynes kynde
Hyt were to lyven in thys wyse ;
For nature wolde nat suffyse
To noon erthly creature
Nat longe tyme to endure
Withoute slep and be in sorwe. (註62)

この ‘ye’ には勿論 John of Gaunt も含まれている。そして彼の眠りの神への祈りは the dreamer awake や Alcione の場合と同様に必ず叶えられ、‘wonder’ な夢を見るであろう。Alcione が夢で Ceyx に会つたように ‘John of gaunt’ も夢の中で Blanche に会うであろう。Ceyx が Alcione に云つたようにその Blanche は彼に云うであろう。

I praye God youre sorwe lysse.
To lytel while oure blysse lasteth ! (註 63)

宮廷人であつた Chaucer は John of Gaunt に無儀に直接この積極的諦観を勧める事は出来なかつた。The Book of the Duchess も物語の極く表面的な筋の上での中心は ‘man in blak’ の口を通して述べられる Blanche の amour courtois の面から理想化された女性像と理想化された恋愛の記述である。然し物語の表面だけでなく inner meaning 即ち morality を読み取る事を作者は期待している。Canterbury への巡礼者達に Nun’s Priest も

But ye that holden this tale a folye,

.....

Taketh the moralite, goode men. (註 64)

と自分の話から morality を汲む事を要求している。そうした morality を推察する習慣のあつた中世人は此の The Book of the Duchess がその interpretatio や significatio と云う修辭上の構成に依り morality として ‘man in blak’ に眠りと諦観を勧めている事をはつきり理解した。この moralityこそ Chaucer が The Book of the Duchess で表現しようと意図したものであり、この詩の中に理解される事を期待したものであり、読者或は聴者が理解すべきものである。(註 65)

以上述べて来た如く宮廷人が自作の詩を王族に捧げると云う事情のため、The

Book of the Duchess の成立過程で作者は忠誠云々義務の面から大きく制約を受けた。そしてその影響は作品の全体にわたつて表現を規定し、技巧的なものにした。此の成立事情と制約の影響は又 Chaucer と立場を同じくして忠誠を表明する *the dreamer in the dream* の言動にも、更に又この詩が *interpretatio* や *significatio* や *morality* に負っている構成にも窺える。この詩は一見冗漫で均衡を欠いて居り脈絡も通つていないように思われるが、上述の如く実は非常に技巧的な構成を有し、冗漫に見える箇所は実は必ずしも冗漫ではなく、むしろ全体の構成上要求されたものであり、各部分が互いに密接に結びついていて正しく均衡を保っている。又無気力に見える最初の部分と唐突な感じを与える結びの部分もやはり全体の構成上必然的に要求されて居り、詩人の詩趣上の欠点ではない。*Introduction to The Man of Law's* (註 66) *Tale* から推察出来るように *The Book of the Duchess* の proem をなしている Ceyx と Alcione の話は初め独立した作品であり、この詩を作るにあつて殆どそのまま挿入された可能性がないでもない。然し *The Book of the Duchess* はその (註 67) 挿話なしには単なる eulogy になつてしまい、此の挿話を構成上不可欠な要素として要求している。中世には伝統的な文学の様式と伝統的な詩的感情が存在し、それ等の明確な枠の中で詩が書かれた。*The Book of the Duchess* の主体も上述の如く (註 68) 此の伝統的な文学様式と伝統的な詩的感情である。ただ宮廷で英語で詩を書く伝統が殆どなかつた時期にフランス語の翻訳に依る習作時代を脱却しつつあつた Chaucer はこの作品を書くにあつて、言語の面でも、又その伝統的な様式と詩的感情の中でも最善を尽くさなければならなかつた。そして彼は実際に最善を尽くした、と云うよりは Lewis がいみじくも云つているように当時の彼に出来る事以上の事を試みよう (註 70) と望み又努力した。此の真摯な若き Chaucer の一端は Blanche の美しさや自分の感情を良く表現出来ずに

Me lakketh both Englyssh and wit
 For to undo hyt at the fulle;
 And eke my spirites be so dulle
 So gret a thyng for to devyse.

Trewly I dide my besynesse
 To make songes, as I best koude,

Although I koude not make so wel

(註 73)

Songes, ne knewe the art al,

.....many a word I over-skipte

In my tale, for pure fere

(註 74)

Lest my wordes myssset were.

ともどかしがつている ‘man in blak’ の言葉にも認める事が出来る。 *The Book of the Duchess* が何らかの欠点を感じさせるとすれば、それは伝統に従い且つ宮廷人の立場を守つてその時の能力以上のことをしようとした Chaucer の過分の熱意に帰さなければならない。

《後註》

(註 1) R. K. Root, *The Poetry of Chaucer*, Houghton, Boston, 1906. Reprint., P. Smith, 1950, pp. 60-63; D. S. Brewer, *Chaucer*, Longmans, London, 1953, pp. 46-7; ‘Chaucer’, in *Dictionary of National Biography*, Smith, London, 1908, vol. 4, p. 160 (by J. W. Hales); J. E. Wells, *A manual of the Writings in Middle English 1055-1400*, Yale University Press, New Haven, 1916, p. 634; J. S. P. Tatlock, *The Mind and Art of Chaucer*, Syracuse University Press, 1950, p. 27; B. H. Bronson, ‘The Book of the Duchess Reopened,’ *PMLA.*, LXVII, 1952, p. 863.

(註 2) Wolfgang Clemen, *Der junge Chaucer; Grundlagen und Entwicklung seiner Dichtung*, Kölner anglistische Arbeiten, 33, Bochum-Langendreer, 1938; J. R. Kreuzer, ‘The Dreamer in the *Book of the Duchess*,’ *PMLA.*, LXVI, 1951, pp. 543-7; G. L. Kittredge, *Chaucer and his Poetry*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1915; G. L. Kittredge, ‘Guillaume de Machaut and *The Book of the Duchess*,’ *PMLA.*, XXX, 1915, pp. 1-24; Bronson, *op. cit.*, pp. 863-81.

(註 3) Also J. M. Manly, *Some New Light on Chaucer*, Holt, 1926, Reprint., P. Smith, 1951, p. 44.

(註 4) Sydney Armitage-Smith, *John of Gaunt's Register* edited for the Royal Historical Society from the original MS. at the Public Record Office. 2 vols., Camden Third Series, vols. XX, XXI, London, Offices of the Society, 1911, Nos. 863, 864, 866, 867, also 859, 865, 868, 869, 870. この中 No. 864 は Rickert に依り英訳されている。Edith Rickert, *Chaucer's World*, Columbia University Press, New York, 1948, p. 139.

- (註 5) F. N. Robinson, *The Works of Geoffrey Chaucer*, Houghton, Boston, Second ed. 1957, p. 776. (Note to ll. 759 ff.)
- (註 6) Robinson, *op. cit.*, *The Book of the Duchess*, ll. 764-73. 本稿の引用中 Chaucer の Text に関するものは総て Robinson に依る。尚 *The Book of the Duchess* の text と manuscript についての note は Robinson, *op. cit.*, pp. 898 f. と E. P. Hammond, *Chaucer, A Bibliographical Manual*, Macmillan, Massachusetts, 1908. Reprint., P. Smith, New York, 1933, pp. 333-339. を参照のこと。
- (註 7) C. Oman, ed., *A History of England*, 7 vols., Methuen, London, Vol. III. *England in the Later Middle Ages* (by K. H. Vickers), 1913, pp. 242 f.; Kemp Malone, *Chapters on Chaucer*, The Johns Hopkins Press, Baltimore, 1951, p. 12; H. R. Patch, *On Rereading Chaucer*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1948, p. 25.
- (註 8) *Confessio Amantis, Prologus*, ll. 83-89. Macaulay, G. C. ed., *The Complete Works of John Gower*, 4 vols., Oxford University Press, London, 1901.
- (註 9) Patch, *op. cit.*, p. 27.
- (註 10) Armitage-Smith, *op. cit.*, Nos. 620, 915, 918, 943, 1091, 1122, 1394, 1585. この中 Nos. 918, 1394, 1659 を Rickert は英訳している。Rickert, *op. cit.*, pp. 419 f. and 415, 'Setting up an Altar for the Soul of the Duchess Blanche,' and 'Orders for Making the Tomb of the Duchess Blanche.' Also Patch, *op. cit.*, pp. 26 f. 尚 John of Gaunt の悲しみはうわべだけの事であつたので Chaucer はそれを考慮に入れて *The Book of the Duchess* を作つたとする Earle Birney の説 (PMLA., LIV, 1939. pp. 643 ff.) は Blanche のこの特異性を無視しているので受け入れ難い。
- (註 11) Gower, *op. cit.*, *prologus*, ll. 54*-69*.
- (註 12) Clemen, *op. cit.*, p. 32; Kittredge, *op. cit.*, (*Chaucer and his Poetry*) p. 37.
- (註 13) R. Bossuat, *Le Moyen Age*, del Duca de Gigord, Paris, 1955, p. 275.
- (註 14) *The Canterbury Tales*, III, 2074-8.
- (註 15) *Ibid.*, IV, 1492-1500.
- (註 16) Blanche の死は Chaucer に *The Book of the Duchess* の詩想のほんのきつかけを与えたに過ぎず、必ずしもこの詩を単なる occasional poem と考える必要はない、と云う Schoenbaum の説は恐らく正しい。然しそれにしてこの詩が John of Gaunt に捧げられている以上 Chaucer は宮廷人の立場から離れる事は出来なかつた。Samuel Schoenbaum, 'Chaucer's Black

Knight.' MLN., LXVIII, 1953, pp. 122 f.

(註 17) *The Book of the Duchess*, ll. 553 f.

(註 18) Kreuzer, *op. cit.*, 'The Dreamer in the Book of the Duchess.'

(註 19) C. S. Lewis, *The Allegory of Love, A Study in Medieval Tradition*, Oxford University Press, London, 1936, pp. 167 f.

(註 20) *The Book of the Duchess*, ll. 475-9.

(註 21) 此の詩では 'man in blak' と Blanche は婚姻に依らない、伝統的な *amour courtois* に基く恋人である事になつている。Also Malone, *op. cit.*, p. 39; Bronson, *op. cit.*, p. 867. 但し Malone も Bronson も mention していないけれども、line 1037 に 'wif' と云う表現があつて、この詩の *amour courtois* の setting に対して唯一の例外となつている。

(註 22) *The Book of the Duchess*, ll. 464, 487.

Courtoisie の文学に於ける complaint は恋人に対する嘆きを歌つたものに限られた。例えば *The Complaint of Chaucer to his Purse*, *The Complaint of Venus*, *A Complaint to his Lady* 等である。此の complaint の他に恋人や親子の死を悼む別の *genre* の complaint もあつた。例えば本引用の短かい complaint (*The Book of the Duchess*, ll. 475-486), Machaut's *Dit de la Fontaine Amoureuse*, North-West Midland 方言で書かれた *Pearl*, Skelton's *Phillip Sparrow*, 更に又 *The Book of the Duchess* 全体もこの complaint に属す。J. W. H. Atkins, *English Literary Criticism: the Medieval Phase*, Methuen, London, 1952, p. 105; E. V. Gordon, (ed.) *Pearl*, Oxford University Press, London, 1953, p. 9 (ll. 241 ff.); P. Henderson, *The Complete Poems of John Skelton*, Dent, London, Second, Revised, ed. 1948, pp. 60 ff.

(註 23) *The Book of the Duchess*, ll. 515-518.

(註 24) *Ibid.*, ll. 523-525.

(註 25) *Ibid.*, ll. 555-557.

(註 26) *Ibid.*, ll. 37-38.

(註 27) J. J. Parry, (tr.) *Andreas Capellanus the Art of Courtly Love* (ed. and abridged by F. W. Locke), Ungar, New York, 1957, pp. 5 ff. and 29 f. Book I, Chapter V, 'In What Manner Love May Be Acquired, and in How Many Ways,' and Book II, Chapter IV, 'How Love May Come to an End.'

(註 28) *The Book of the Duchess*, ll. 1139-1143.

(註 29) *Ibid.*, ll. 1307-1310.

(註 30) 此のような劇的手法は Chaucer に original なものである。此に類する例として更に Juno の使者が Morpheus の許に来た時の例を挙げる事が出

来る。*The Book of the Duchess*, ll. 178-188. Ovid にあるこの episode は Chaucer が *The Book of the Duchess* の source の一つに用いた Machaut の *Dit de la Fontaine Amoureuse* にも, Gower の *Confessio Amantis* にも用いられている。Chaucer は Ovid と Machaut のものを取捨してとり入れているが、此の使者の描写の部分は全く彼の original なものである。(Also E. F. Shannon, *Chaucer and the Roman Poets*, Harvard University Press, Cambridge, 1929, p. 9.) “who ys lyth there?” と云う ‘most informal passage’ や “Juno bad thow shuldest goon.” と云う ‘dialogue passage’ (M. Schlauch, ‘Chaucer’s Colloquial English: Its Structural Traits,’ PMLA., LXVII, 1952, pp. 1110, 1111.), 相手が起きかかつて居るのに気付いて複数形で繰返される “Awaketh!” の使用法, 耳に ‘horn’ をあてて吹く使者, 睡くてやつと片目だけ開けて (—これは Machaut にある— Robinson, *op. cit.*, p. 774, note to line 184.) 物憂げに短く “who clepeth there?” と尋ねる Morpheus 等少なからず喜劇的要素を有しているが、如何にも real で劇的なもので、使者や Morpheus の性格がきびきびと描かれている。Also A. K. Getty, ‘The Mediaeval-Modern Conflict in Chaucer’s Poetry,’ PMLA., XLVII, 1932, pp. 385-402; C. Muscatine, *Chaucer and the French Tradition, A Study in Style and Meaning*, University of California Press, Berkeley, 1957, pp. 104 f.; Brewer, *op. cit.*, pp. 46 f.; 厨川文夫, 「中世の英文学と英語」, 研究社, 東京, 1951, p. 281; Machaulay, *op. cit.*, Gower’s *Confessio Amantis, Liber Quartus*, ll. 3024-3033.

(註 31) *Troilus and Criseyde*, Book V, 1170-1176.

(註 32) Atkins, *op. cit.*, pp. 201 f.; Edmond Faral, *Les Arts Poétiques du XII^e et XIII^e siècle, recherches et documents sur la Technique Littéraire du Moyen Age*. Champion, Paris, 1958, pp. 231 ff.

(註 33) Faral, *op. cit.*, pp. XII f.

(註 34) Geoffrey of Vinsauf は Richard I が殺された金曜日に対する ‘complaint’ を *Poetria Nova* に書いた。*The Nun’s Priest’s Tale* で Chauntecler が狐につかまつてしまった時に Chaucer はその Geoffrey of Vinsauf の ‘complaint’ をもじつて ‘……wolde I shewe yow how that I (i. e. Chaucer) koude pleyne For Chauntecleres drede and for his peyne.’ と云つて Chauntecler の妻達に対する一種の ‘complaint’ を書いた。Chaucer はそこで Geoffrey of Vinsauf の art poetical を散々に茶化している。尤も *The Book of the Duchess* も追悼詩で ‘complaint’ であるが *The Nun’s Priest’s Tale* に於けるような art poetical に対する皮肉や茶化しは全くない。

The Canterbury Tales, The Nun’s Priest’s Tale, VII, 3347; Robinson,

- op. cit.*, p. 754; Atkins, *op. cit.*, p. 155.
- (註 35) B. S. Harrison, 'Medieval Rhetoric in *the Book of the Duchesse*,' PMLA., XLIX, 1934, pp. 428-442.
- (註 36) 'White,' *The Book of the Duchess*, l. 948; 'Blanche,' *The Legend of Good Women*, l. 418.
- (註 37) Atkins, *op. cit.*, p. 104.
- (註 38) *The Canterbury Tales, The Clerk's Prologue*, IV, 16-18.
- (註 39) Also Manly, *op. cit.*, pp. 278 ff.
- (註 40) originality と borrowing については例えば Root, *op. cit.*, pp. 21 f.; Manly, *op. cit.*, p. 279; J. L. Lowes, *Geoffrey Chaucer*, Oxford University Press, London, 1934, p. 102; T. R. Lounsbury, *Studies in Chaucer, his Life and Writings*, Osgood, London, 1892. vol. II, pp. 212 ff. を参照のこと。
- (註 41) D. Everett, *Essays on Middle English Literature*, Oxford University Press, London, 1955, pp. 156 ff.
- (註 42) *The Book of the Duchess*, ll. 574-576.
- (註 43) *Ibid.*, ll. 591-7.
- (註 44) *Ibid.*, ll. 743 f.
- (註 45) *Ibid.*, ll. 1137 f.
- (註 46) *Ibid.*, ll. 1305 f.
- (註 47) *Ibid.*, 1) l. 226, 2) l. 598, 3) l. 816, 4) l. 847, 5) l. 1076.
- (註 48) Also Everett, *op. cit.*, p. 162; Clemen, *op. cit.*, pp. 39 ff. Clemen は *The Book of the Duchess* の repetition をすぐ話の本筋に入らず婉曲に表現しようとする Chaucer の *goût des complications* に依るものと考えている。一方 Everett は本稿と同じくこの詩を *interpretatio* と考えている。
- (註 49) *The Book of the Duchess*, l. 104.
- (註 50) *Ibid.*, ll. 118-21.
- (註 51) *Ibid.*, ll. 61 and 233.
- (註 52) *Ibid.*, ll. 201-211.
- (註 53) Theme の repetition で問題になるのは the dreamer in the dream ではなく the dreamer awake である。N.B. Kreuzer, *op. cit.*
- (註 54) *The Book of the Duchess*, ll. 30 f. and 37-40.
- (註 55) *Ibid.*, l. 9.
- (註 56) *Ibid.*, ll. 240-247.
- (註 57) *Ibid.*, l. 277.
- (註 58) *Ibid.*, ll. 477-479.
- (註 59) *Ibid.*, l. 511.

- (註 60) *Ibid.*, ll. 96-100.
- (註 61) *Ibid.*, ll. 278 f.
- (註 62) *Ibid.*, ll. 16-21.
- (註 63) *Ibid.*, ll. 210-211.
- (註 64) *The Canterbury Tales, The Nun's Priest's Tale*, VII, ll. 3438 and 3440.
- (註 65) Chaucer の結びの部分の重要性については Atkins, *op. cit.*, p. 157. Scottish Chaucerian の Robert Henryson は物語の Morality を明確にするために *Orpheus and Euridice, The Bludy Serk* の最後の部分, それに *The Moral Fabillis of Esope the Phrygian* の各々の話の最後の部分に *Moralitas* の項を特に付け加えている。H. Harvey Wood, *The Poems and Fables of Robert Henryson*, Boyd, Edinburgh, 1933. 2nd ed. 1958, pp. 7, 16, 23, …, 142, 176. Also Everett, *op. cit.*, p. 162
- (註 66) *The Canterbury Tales*, II, ll. 57 and 47.
- (註 67) N.B. Spenser's *Daphnaïda*; T. W. Nadal, 'Spenser's *Daphnaïda* and Chaucer's *Book of the Duchess*.' PMLA., XXIII, 1908, pp. 646 ff.
- (註 68) Also 厨川, *op. cit.*, p. 282.
- (註 69) 例えば Manly, *op. cit.*, p. 275.
- (註 70) Lewis, *op. cit.*, p. 170.
- (註 71) *The Book of the Duchess*, ll. 898-901. 此のような modesty は conventional なものであるが, ここに於ては全くの convention だけで用いられているのではない。Cf. *The Canterbury Tales, The Squire's Tale*, V, ll. 34-41; *The Franklin's Tale*, V, ll. 716-727; Robinson, *op. cit.*, p. 722, note to l. 716.
- (註 72) *Ibid.*, ll. 1156-1157.
- (註 73) *Ibid.*, ll. 1160-1161.
- (註 74) *Ibid.*, ll. 1208-1210.